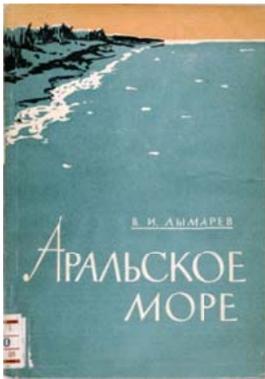


ニコライ・アラディン（ロシア科学アカデミー動物学研究所） 追悼：ヴァシーリー・リュマリョフ博士～アラル海地形学の父～

本年 5 月 27 日にアラル海の湖岸地形研究の父とも言うべき地形学者であるヴァシーリー・リュマリョフ博士が亡くなった。筆者はアラル海流域の水利開発史を専攻しているが、リュマリョフ先生に直接お会いしたことがあるわけではなく、知己のあるニコライ・アラディン先生（ロシア科学アカデミー動物学研究所）よりリュマリョフ先生の訃報について伺った。大著『アラル海：自然地理学的研究の試み』を 1908 年に出版したレフ・ベルグをアラル海研究の第一世代とするならば、リュマリョフ先生はアラル海研究の第二世代に属すると言い得る。そして、海洋地形学がご専門ということで、アラル海の湖岸地形の研究で大きな成果を残された。筆者は、その名も『アラル海』（1959 年）という、リュマリョフ先生によるアラル海自然地理の概説書を拝読したことがある。同書は北大低温研図書室に所蔵がある。アラディン先生によれば、追悼文を執筆したので、ぜひ日本語に翻訳してウェブや雑誌に載せて欲しいとのことだった。拙文の後に、追悼文の全文日本語訳を掲載したのでご一読いただければと思う。



追悼文にもあるとおり、リュマリョフ先生は、アラル海が人為的理由により縮小する前、アラル海が満々と水を湛えていた 1950 年代に本格的な調査研究を行った最後の世代に属していた。いわば、リュマリョフ先生はアラル海の縮小過程を最初から最後まで見守ってきたのである。周知のとおり、ダム建設により水位が回復した北部の小アラル海を除き、アラル海はほぼ死滅してしまった。それだけでなく、アラル海の漁業は湖水塩分濃度の上昇で壊滅し、露出した湖底から塩分が砂と共にダストストームとなって吹き飛ぶことにより、アラル海周辺の灌漑農地を塩害に追いやり、さらには周辺住民に腎臓や呼吸器の疾患を蔓延させた。しかし、このような生態学的な危機はすでに過去のものとなってしまった。アラル海の復元は恐らくはもはや不可能であろう。現在必要なのは、このような生態学的な危機がいかんにして生じたのかについての歴史的解明と言い得る。

水を湛えていたアラル海の自然地理について包括的に研究し得たのは、リュマリョフ先生の次の世代にあたるアラディン先生、フィリップ・ミクリン先生、石田紀郎先生など第三世代の研究者が最後になるのかもしれない。大アラル海はすでに死んでしまった。しかし、このような世界史上最大とも言い得る生態学的危機を今後繰り返さないためにも、筆者は、リュマリョフ先生というアラル海の銜学たる先達の意味を受け継いで、今後ともアラル海問題の人文科学の立場からの歴史的な研究に取り組んでゆきたいと考えている。

ヴァシーリー・ヨシフォヴィチ・リュマリョフ

Васи́лий Ио́сифович Лыма́рев 1920-2012



2012年5月27日、ヴァシーリー・ヨシフォヴィチ・リュマリョフ氏が92歳の人生を終えた。リュマリョフ氏は、地理学博士、教授、ロシア連邦科学功労者、ロシア地理学協会名誉会員の称号を有し、ロシアの海洋地理学と科学的な海洋利用法の基礎を築いた人物の一人である。

リュマリョフ氏は1920年8月20日、労働者一家の息子としてクラスノダール地方ウマニ村(コサック村)に生まれた。幼少時代、夏にピオネール・キャンプで過ごした彼はそこで初めて海を見て、その後は生涯にわたって海を愛することになった。1941年、優秀な成績でモスクワ国立教育大学を卒業。大祖国戦争時には戦時中を通してモスクワ防衛に加わった。終戦時は中尉、通信小隊長。軍功により祖国戦争二等勲章や数々のメダルを授与された。

復員後、リュマリョフ氏はモスクワ国立大学地理学部大学院を好成績で修了。1949年にはクリル諸島の海岸地形についての論文で博士候補号を取得した。

リュマリョフ氏は、大学院の指導教官だった恩師のフセヴォロド・パヴロヴィチ・ゼンコヴィチ教授の研究を継承し、大学院修了後ほぼ20年にわたりロシアの数々の高等教育機関で地理学系の講座を率いた。

1953年から56年まで、リュマリョフ氏率いるアバイ名称アルマアタ教育大学自然地理学講座調査隊により、アラル海岸の地理・地形観測、地形分類が行われた。当時、アラル海は水面の上昇期にあった。調査の結果、乾燥帯の内陸水塊であるアラル海の湖岸地形を11種類に分類し、それぞれにさらに下位分類を行った。ロシアの湖岸・海岸研究史上初めて、乾燥帯の湖岸に植物発生のヨシ原の一種があることが記述された。アラル調査隊の調査記録がリュマリョフ氏の博士論文と単著である『乾燥帯の内陸水塊アラル海の湖岸』(1967年)の基礎となった。リュマリョフ氏は二十世紀で水位が最も高かった時期にアラル海を調査研究した最後の学者であった。

博士号取得後、リュマリョフ氏は極東大学とカーニングラード大学の地理学部の学部長を務め、1971年にはクバン大学で沿岸・海洋研究室を創設した。

リュマリョフ氏は膨大な量の実証的データを総合し、海洋管理を大洋・島嶼・沿岸(海岸)自然管理へと類別して初めて論じた人物である。リュマリョフ氏は270以上の学術業績を執筆し、その中には複数の学術書や教科書が含まれる。

1993年より10年間、リュマリョフ氏はロシア国立水文気象大学漁業海洋学・自然水保護講座教授を務めた。2009年からは研究方法論に関するモノグラフ・シリーズである「今日の海岸管理の基礎概念」の編集・出版に携わってきた。このシリーズはロシア地理学協会地理学委員会の推薦を受けている。

リュマリョフ氏は地理学知識の活発な普及者だった。ロシア地理学協会の大会は全て、さらには

数多くの地理学や海図作製に関する国際大会や会議に参加している。大規模な学術フォーラムでの自身の報告では、海洋そのものだけでなく、沿岸部や島嶼部を含めて総合的に自然を研究し、開発する必要性を示している。2010年秋に開催された第23回国際海岸会議の組織委員会と参加者全員がリュマリョフ氏の90歳を祝った。この会議は「海岸の発展理論：長年の伝統と今日の理想」と題され、前述のリュマリョフ氏の師匠であるゼンコヴィチ生誕100周年を記念して開かれ、ロシア科学アカデミー海洋問題会議「海岸」作業グループが主催した。リュマリョフ氏は、その多くの弟子や同僚にとって生きた伝説だった。彼はレフ・ベルグ、ボリス・ドブリニン、フセヴォロド・ゼンコヴィチら、今日の海岸に関する諸理論の構築者と個人的な知己があったのだ。

リュマリョフ氏にとって、ロシアの沿岸部開発をめぐる歴史的・地理的問題が最も重要な研究課題だった。この方向での長年にわたる研究の成果が、『海・大洋の沿岸地域に関する祖国の研究者』（2002年）である。リュマリョフの生活と創作において「アラル海時代」の意味は大きく、それを考えれば、祖国の海岸研究者の中で彼が好んだのがアレクセイ・ブタコフだったことも驚くにあたらない。この「アラル海のコロンブス」（フンボルトの表現）に捧げられたのが彼の著作『アレクセイ・イヴァノヴィチ・ブタコフ 1816-1869』（2006）である。海岸研究についてのブタコフの理論的見解の重要性を初めて世に示したのも彼である。また、リュマリョフ氏は、ブタコフによるアラル海研究の学術的成果と後のベルグによる研究成果の比較対照にも成功した。彼の言によれば、アラル海（湖）を最初に研究したブタコフとベルグの学術業績は、この水塊が1世紀半を経てどのように変化したのかについて豊かなデータを提供してくれる。

リュマリョフ氏が参加した最後の学術フォーラムとなったのが国際会議「生物学における塩分の要素」（「限界塩分濃度」概念創出50周年と生物学博士ヴラチスラフ・フレヴォヴィチ80歳を記念）である。この会議を締めくくるにあたり、リュマリョフ氏はアラル海地域の生態学的状況について、フランス国立宇宙センターのJ. F. CretauxとMira Production社のT. Gentetのインタビューに答えており、以下のサイトでその内容を知ることができる：<http://www.mira.fr>。

同志・同僚一同

N. アラディン、T. エレミナ、S. イバトウリン、V. カガン、D. カイゼル、Zh.-F. クレト、F. ミクリン、I. プロトニコフ、A. スムロフ、M. シリンほか